

漢字の読み方とそこから伺える歴史の断片

尾関 郁

歴史に出てくる漢字の読み方には困惑することが一度や二度ではない。一体だれがどんな基準で決めているのか。NHK ドラマ「鎌倉殿の13人」を見ていたら「コウギョウ」と呼ぶシーンがあるたびに「工業」「興行」「鋳業」「鋼業」と頭の中は慌ただしく文字を検索した。だが、場面と一致するものがなかった。ミステリー・ワードとして聞き流しながら電子漢和辞典に頼ることにした。やがて「コウギョウ」とは出なかったが、「公暁」とわかった。「なんだクギョウのことじゃないか、勝手に名前を変えるな」とテレビに向かって怒鳴った。辞典は断固として旧態依然を守っているのか、でもそのうち改訂されてクギョウは消される運命なのだろうか。結局、最初の言い出しっぺが発した読み方を後の人が鵜呑みにして使い、それがあたかも市民権を獲得したように大手をふるっているだけで、特許ではないから他の人が異なった読み方をしても文句はないはずだ、と気が付いた。

ところで古代史では「ヤマトイコク」や「ヒミコ」はとっくの昔に確定したかのように世間に広く出回っているが、これらも根拠不明で怪しいものだと思えてきた。何故そう読まれたのか、そう読むところに名付け親の何かの意図か悪く言えば陰謀があるのではないかと疑心暗鬼になり、一度見直してみるのも悪くはない、ひょっとしたら自分が新たな名付け親になれるかもしれないと妄想したのである。そこで古代史を語る上で代表的な漢字を選んで考察することにした。すると意外なことに・・・。あとは読んでのお楽しみということで。

1.『倭』は「イ」、呉音と漢音、「ヤマト」はヘブライ語？

さて、それでは陳寿が書いた三国志から漢字を取り上げよう。最初の文字は「倭」である。これまで筆者を含めて誰もが「わ」と読み、そのように読むことになんらの疑問を抱いていないようだ。当然「倭国」は「わこく」、「倭人」は「わじん」と読んでいる。その人達に「わ」と何故読むのか、という質問をぶつきたい。きちんと答えられる人がいるのか？

ここで漢字の発音の説明に入ることにしよう。漢字は年代によって発音が変わる。沼本克明氏は年代によって層を為している、そして卑弥呼の時代は呉音であると述べる。たとえば、「明」の呉音は「ミョウ」で、漢音は「メイ」、そして「ミン」が唐音である。わかりやすいように、その層の構造を下の表で示す。

この表以外に「魏音」があるとの説を聞いたが、まだ市民権を得ていないようである。少なくとも現在の沼本氏の分類の範疇には入っていない。従って「倭」は「イ」で、「倭国」は「イコク」で、

層	音	
新新層	唐音・宋音	「倭人」は「イジン」ということ。では「ワ」というのは間違いかというとそうではないようだ。しかし、だいぶ後の時代から「ワ」に発音が切り替わったということになる。ではいつ頃に切り替わったのかというと、これは一つの課題であってはつきりわからない。沼本氏は漢音が呉音の層に潜るとい
新層	漢音・新漢音系	う難しい表現をしているように、或る年に一斉に切り替わったとは考えにくく、おおよそ 300 年代から 500 年代の間という
中層	呉音系	
古層	古音系	

うことぐらいは言えるだろう。その根拠は唐代の顔師古(ガンシコ)が前漢書に入れた注釈によると、

西晋時代の如淳(ジョジュン)は「委」と「倭」の発音は同じと述べたのに対し、顔師古は発音が違うと述べていることが呉音と漢音の違いを示唆したことになり、そこから推定したものである。しかし、呉音から漢音に切り替わるのに 200 年もの年月がかかったとは思えないので、その間の或る年から或る年までの間であろうということしか今の筆者は言えない。倭国がその漢音を輸入したのは、遣唐使として唐に渡った熱意のある人物だと思う。従って列島で「ワ」と読むようになったのはそれ以降ということになるだろう。

歴史の断片として申せば、金印「漢委奴国王」は後漢書の記述では「金印紫綬(金の印章と紫の紐)」と単なる「印綬」とは書き分けられており、倭は「印綬」しか授かっていないことから皇帝から金印を下賜されてはいないことがわかるが、その金印が作られたのは「倭」から「委」に音写して文字が替わったが発音は同じだった頃ということになる。つまり唐時代より前と言えそうである。

一方、「倭」を呉音や漢音といった大陸の人が使う言葉ではなく、列島では「やまと」と発音していたとする説があるが、もしその発音を魏の使者が聞いたならば「卑弥呼」のように「〇〇〇」と三文字の漢字仮名で記録していたことであろう。そもそも列島には漢字が輸入されておらず、いや数文字くらいは何かの機会に輸入されていたかもしれないが、広く普及しているとはとても思えないので、「倭」の字を見て「やまと」と言うはずがなかろう。実は、「やまと」という語源が明確にわかっていない。一説に言われる「山門」や「山戸」説に対して、先ず二つの内どちらなのか問いたい。次に「やまと」が「山の入口」という意味で使っていた証拠または証拠らしいものを提示することが求められる。それに「山門」や「山戸」という地名は全国に幾つかあって、どうして奈良にあるものだけが国名まで昇格したのか説明していただきたい。音韻的には「やまと」の「と」は「山門」や「山戸」の「と」とは異なるという説もある。山門・山戸説に納得できない最大の理由は、国名まで昇格するにはそれなりの主要性を備えているもので、たとえば千葉県という名称は豪族千葉氏の謂れとされているように千葉氏がそれなりの主要性を帯びていたからで、主要性を備えていない一介の農民では無理であり、「山門」「山戸」が国名になるにはあまりにも貧相であろう、ということである。

筆者はひょっとしたら、いやかなりの蓋然性をもって「やまと」はヘブライ語の「ヤマトゥ」ではなかったかと考える。その重要な根拠は、2020 年の NHK の番組でヘブライ大学のシロニー教授が日本には 500 ものヘブライ語が使われている、との弁を紹介していたことである。一説には 1000 ぐらいはあるということで、その中でハッケヨイとかワッショイという掛け声のほかに住居の意味のハスカーが「飛鳥」、神への感謝の意味の「アリ・ガト」、そしてなによりも重要な「神の民」の意味の「ヤマトゥ」が地域名又は国名に採り入れられたということである。なるほど、「神の民」ならば国の名称になり得る主要性を備えていると得心する。

このヘブライ語説には当然のように、遠く離れたイスラエルからどうして東端の日本列島に来ることが出来たのか、との疑問が投げかけられる。当初所謂トンデモ説と筆者は思ったが、調べていくうちに彼らが渡来するのはさほど難しいこと、可能性の低いことではなさそうに思えてきた。もともと遊牧民だったとされるユダヤ人はイラン辺りに居住していたが、周りの民族に地中海東岸へと追いやられ、そこもアッシリアやバビロニヤ、特にローマ帝国に追い払われて支族ごとに世界各地へと散らばり、インドあるいはキリギスに移った支族が居て、中にはネトリウス派という一派は唐代の初期には景教としてキリスト教を広めたということである。また、イラン系のソグド人がシルクロードの隊商に多く居て、ユダヤ系の人にも加わりやすい状況だった。人数はわからないが彼ら

が日本に渡来した証のようなものは、一つは千葉県芝山古墳や茨城県東海村の古墳で発見された高い帽子をかぶり、髪を鬢(みずら)のように長くしたユダヤ人風の埴輪、二つには伊勢神宮の石灯籠の横面に彫られたイスラエル国旗のマークになっている六角星、三つには全国に10個以上あるとされるピラミッドなどが挙げられる。先ほど述べた支族の一つのキリスト教ネストリウス派は中華共和国の天山山脈北側、シルクロード北路のイリ川一帯に住み、伊寧(イネイ)の町の恵运城(ケイウンジョウ)またはその近くにあったとする城を弓月城(ユヅキジョウ)とし、そこから渡来した人を日本書紀・応神紀や新撰姓氏録・仲哀の項及び資治通鑑に出る弓月君とする説に繋げている。しかも伊寧より下流にある「雅馬図」「那拉提」が奈良県に地名遷移して、それぞれ「ヤマト」「ナラ」と呼ばれるようになったと説く。しかし、この説の信憑性を高めるにはもっと調査・考察が必要であろう。つまり「やまと」山門・山戸説に拘束されずに広い視野で検討することが求められているということである。

2.『邪馬臺国』は「ジャマイコク」…音写文字

次は邪馬台国、いや、現存の三国志の「邪馬壹国」。ほとんどの人が「壹」を「台」に勝手に替えて「やまたいこく」と読んでいる、何故か。江戸時代に新井白石の古史通惑問(こしつうわくもん)に書かれているからと答える人は少ないであろう。江戸時代の読みに疑問を抱かずに鵜呑みにしているのは学問を停滞させていることで、大変遺憾だ。古田武彦が「ヤマイチコク」と読んで話題となり、その流れを汲んでいるのかいないのかはわからないが、現在でも少数の人がそう読んでいる。その勇氣は高く評価する。読みの変化過程については壹(三国志原典)⇒臺(范曄が誤字で後漢書を書いた)という見解と臺(范曄が三国志の原典通りに後漢書を書いた)⇒壹(三国志の転写本を書く際に書き替えた)という見解に分かれるであろう。ここで「後漢書」にわざわざ范曄なる撰者を付け加えていることに疑問に思う方も居られるかも知れないので、後漢書について少し説明する。後漢書に限らず古代文献は複数の人に綴られていることが多く、後漢書はその中では多くて九人も書いているからである。ほとんどが滅失または散逸した。范曄が後漢書を書こうとしたモチベーションは、彼の時代にはほとんどなかったからだと思う。中でも袁山松の撰は渡邊義浩氏が彼の著で紹介し、裴松之が三国志で引用した謝承の撰はたびたび断片が幾人かの研究者の作品に現れるものの「倭」についての記述は范曄の撰にしか出ていないのでこの先の後漢書としてある場合は范曄の撰とことわっておく。話が中断してしまったが、臺と壹の替わり方について読者はどちらに軍配を上げるか? それとも独自の見解を持っておられるのか? 或る書道家は、臺も壹も草書体では非常によく似ていて間違いやすいとして誤字説を主張したが、原典を見ないでなぜ草書体で書かれているなどと言えるのか。大陸の古文献のほとんどは楷書または楷書に近い字で書かれ、この説の信憑性はないと言える。古文献の転写人はその道のプロであろうから臺と壹を見て、部分の違いがわからないとは思えない。

臺と壹の問題を考えるには、先ず文字の変化の仕方を考察しなければならない。大陸や日本の古代文献、いや現代でも引用または転写には文字だけでなく句・文でさえ替えられている例は幾つも見られる。間違えたというより自己顕示欲なのか故意に替えたかと判断できるものが少なくない。そこには一定のルールがあるのに、それを知らないで誤字と誤判断しているようである。元から替わった字には a 音写文字 b 訓写文字 c 同属的文字の三種類があり、音写文字は発音が、訓写文字は意味が元の字と同じか似ているもので、同属的文字は偏か旁が同じものである。日本書紀の「伊弉

諾(イザナギ)」は古事記の「伊邪那岐」の、さらに他の人物名のほとんどが音写文字である。また、便所と同じ意味のお手洗いや御不浄が訓写文字である。わかりにくい同属的文字の好例は隋書の「倭(タイ)」であり、同じ人偏の倭の同属的文字であるとその節の校勘記(コウカンキ)に記されている。では、臺または壹は abc のいずれなのだろうか。a の呉音を調べると臺が「ダイ」、壹は「イチ」で近い発音とは言えない。b の意味では臺がうてな・物を載せるもの・つかさで、壹は一つ・もっぱら・すべて・合う・集まる等で近くはない。c の同属的という点では士・口のいずれも同じ偏の集合に入っていない。つまり、字が替わる abc のいずれも該当しないようである。ところが発音の一つの字音では臺が「イ・ȳ」で壹は「イー・ȳ」なので、かろうじて音写文字ということになる。

いよいよ『壹⇒臺、それとも臺⇒壹なのか』という課題に移る。それには後漢と三国志の勃興・滅亡時期と後漢書と三国志が書かれた年をわかりやすく年表で示しておこう。だが、その前に漢は三つもあるので整理しておきたい。秦国が滅んで紀元前 202 年に興った国を前漢、ただし中華共和国は京師を西の長安としているので西漢と呼び、一度滅んだ後の紀元 25 年に復活した漢を後漢(中華共和国は東漢)、さらに 950 年に成立した漢を中華共和国は後漢と呼んでいる。ここで単に中国としないのは大陸には中華共和国、台湾島には中華民国が歴然と存在しているからであり、念のため中華共和国が中華民国から分かれて独立したので台湾の独立は必要ないことを明記しておく。

ここでわかることは、後漢が魏

後漢と魏の興亡と三国志・後漢書の年代

年	国	文献	執筆者	
25	後漢が興る			より古いのに後漢書は魏書よりも新しいのである。つまり、後漢が滅んで 200 年も過ぎてから後漢書が書かれたのもので、范曄が見た資料は何か問題になるのである。
220	魏が興る			范曄の後漢書の前に八人がそれぞれ後漢書を書いたのだが、ほとんどが現存しておらず、残っている
221	後漢が滅ぶ			後漢書には倭に関する記述はない
265	魏が滅ぶ			とのことである。その当時の文献は散逸・滅失したのか日本に写本が輸入されていないのかほとんど見つけることができなかった。もしかしたら范曄は三国志の倭人の
284		三国志が成立	陳寿	
426		後漢書が成立	范曄	
429		三国志に注釈	裴松之	
676		後漢書に注釈	李賢	
960		三国志の乾隆本	不明	
1162		三国志の紹興本	不明	
1200		三国志の紹熙本	不明	

節を見たのではないかと閃いた。そこで念のため後漢書と三国志の倭に関する記述を対比させてみたら、なんとそっくりであることが判明したのである。でも、それは筆者の独りよがりの見方かもしれないので下に並記した。読者の判断を仰ぎたい。

後漢書：倭在韓東南大海之中 依山嶋為居

三国志：倭人在帶方東南大海之中 依山嶋為国邑

これは倭に関する記述の最初の文である。倭と倭人、韓と帶方、居と国邑などの字の使い方は時

代の違いを示すためか、少し異なっているが文の構成は同じと言える。

帯方郡は AD204 年に遼東に居た公孫康が平壤辺り一帯の楽浪郡の南部を分けて新設したので、後漢書で帯方郡と書いても間違いではなかったのに、韓と書いたことに三国時代より昔であることを示すわざとらしさが感じられる。

その後続く文も同じような調子なので省くとする。疑問のある読者はご自分で対比表を作ってみたらいかがか。もし、范曄が三国志を見ないで書いたならば、全く別の文章になるかあるいは書けなかったのではないかと思う。ということで范曄は三国志を後漢書にコピーしたので三国志の原典は臺であったこととし、後の時代に「臺(イ)」を音写して「壹(イー)」に替えたと判断し得る。

では、字が替わったのはいつ頃かというのは、今のところ想像の域を出ないが、960 年に写本(乾隆本)を作る編集会議で皇帝の陵を指す「臺」にクレームがついて替えたと思う。ところが、983 年に成立したとされる太平御覧なる文献には耶馬臺国が使われていて、未だ壹に切り替わっていないということで 960 年交替説は否定されそうですが、同じ文献に耶馬壹国も使われており、既に字の交替が始まっている旨を示唆していて、960 年交替説はなんとか生きながらえそうである。

次に頭文字の「邪」の検討に進む。漢音では「シャ」、呉音では「ジャ」で、地名は双方とも見当たらなかった。地名でなければ呉音で邪魔、邪道、邪気など幾つかあるが、漢音にはない。確かに 983 年成立の太平御覧には狗耶韓国、耶馬臺国、耶馬壹国、660 年以前の翰苑には耶馬嘉国、636 年の南史と 629 年の梁書のいずれも耶馬臺国とあって邪が耶に替えられたと言えるが、音写文字なのか同属的文字なのかははっきりしないし、耶に替わったのは唐代以降であって卑弥呼の時代では判定できない。「琅邪」は「ろうや」と読むので「邪」を「や」と読んだ説に対して、「や」は字音なのでいつ頃日本で発音されるようになったかは証拠が見当たらず定かでない。つまり「ジャマイコク」と読まれた可能性はあるということではないか。にもかかわらず「ヤマタイコク」に固執するのは大和国に繋がっていると思込んでいるか、意図的に結び付けたいためと考えられる。

3.『卑弥呼』を「ヒミコ」と読むのに疑問があるのか

今までなにも疑わずに馴染んでいた読み方が次々否定されると自分の存在が否定されたような錯覚に陥って、反発心が芽生えてきたのではないかと心配になる。しかし、心を広くして「そういう読み方があるのか」と受け止めていただければ幸いである。

一般的な「ヒミコ」読みのほかに「ヒメコ」「ヒビコ」「ヒミカ」「ピミカ」とあっても「弥生」の「ヤ」を採った「ヒヤコ」は聞いたことがない。「ヒメコ」は「比古」を「彦」に音写させる用例から「ヒメ」を「比売」「日売」「媛」「姫」に音写させた説で、「ヒミカ」は 660 年頃に書かれた翰苑(カクエン)に「卑弥娥」と「娥」になっているので音写したと考えられるが、「呼」には漢音も呉音もなく原字の「乎」は漢音が「コ」で呉音は「ゴ」と出ている。美人の意の「娥」をもって「卑弥呼は美人だった」とする決めつけや、漫画やポスターで美人に描くのは、その人の自由であるが、妄想も過ぎるというものである。また、古代にはハ行の発音がなく、半濁音のパ行だったという「ピミコ」説を証明するのは難しい。「ヒミコ」と読む根拠を探して頭を痛めてしまった。というのは三国志・魏書卷四の初出は「俾彌呼」とあり、「俾」の呉音が「ハイ」、漢音が「ヘイ」であるからだ。「イ」は「ッ」のように小さい音としても「ハミコ」の賛同者は得られまい。「卑」には漢音・呉音がなく、字音という日本語化した漢字の発音で「ヒ・bei」「ヒ・bi」とあり、「ヒ・bi」から「ピミコ」と発

音した可能性はホンノリあると言えなくはない。「弥」は漢音が「ビ」で呉音が「ミ」であり、「弥生」の「ヤ」は訓読みなのである。こうしてみるとどの読み方にも決め手がないようで、逆に特定の読みを間違いだと断じる材料はないが、筆者は浜名寛祐の著の日韓正宗遡源(神頌契丹古伝)に倭人集団のリーダーの一人として蕡彌(ヒミ)を登場させていることを加味して「ヒミゴ」と読むことにする。

ちなみに狗奴国王の卑弥弓呼(素)を岩元正昭氏は「ヒミクコシ」と読んでいる。

4.『都』は「みやこ」ではない

三国志にある「女王之所都」を「女王のみやこするところ」という訳が大手をふるって、実に情けない。そもそもその時代に「みやこ」という言葉がある筈がないだろう。「みやこ」とは「御屋処」あるいは「宮処」と書き、「偉い人の家」すなわち「統治者の居る所」で、大陸では京師、略して京と呼んでいる。京は「大きい」、師は「大勢の人」という意味で、京師そのものには「統治者の住む所」という意味はないようだが、皇帝の住む所は大勢の人が住む町に当て嵌まっているのでそう呼んだのであろう。倭人はそれを輸入して平城京を京と呼ぶ。今は統治者が居ないにもかかわらず「京都府、京都市」を公然と使用していても誰も異議を申し立てない。もっと奇妙なのは、全国的統治者がいない名古屋周辺を「中京」と呼称していることだ。不思議である。では、みやこが統治者の居る京師なら、統治者のいない都は一体何であろうか。多くの人は、その違いを意識しないで使っているようだ。そこで大陸の文献で京師と都の用例を調べてみた。その一部を下の表で示す。

文献	京と都の用例		この表から京師は国の中心地、すなわち皇帝に向けて使われていて、他方、都は都尉や都督などの地方出先機関か行政職に用いられており、皇帝が住む所を表してはいない。従って、魏の時代にあつては皇帝が住む洛陽のみが「みやこ」であり、倭の女王が住む所は「みやこ」である筈がない。念のため地名を全国地図で調べたところ、「タ」読みの1か所、「ト」読みの4か所に対し「ツ」読みが21か所にもなぼり、しかも日本書紀や万葉集も「ツ」と読み、隋書では対馬を「都斯摩」としているの
	都	京	
尚書	都慎厥	京師去二千五百里	
前漢書	如南夷置一都尉	傳詣京師	
後漢書	楽浪都尉	後至京師	
三国志	騎都尉	易京を保守	
晉書	都督江北軍事	執婦于京師	
宋書	都督營平二州	徑向京師	
舊唐書	置二十四都督	京師修太廟成	

として、呉音の「ツ」とするのが妥当と考える。魏の役人が倭国に来て「都」を3文字で発音することなどあり得ないであろう。これでもまだ日本では「みやこ」と呼んでいた、と主張するならば万葉集に出る都の字を「みやこ」と振り仮名をした用例を示すべきである。

ならば、と三国志本文の「南至邪馬壹国女王之所都」はどのように訳すのか、「女王の所ツ」では訳にならないではないか、「邪馬壹国女王のミヤコする所」の方が日本文としてピッタリする、と旧来の訳が良いという意見である。一見その通りと思われるかもしれない。だからこそこれまで誰も異議を唱えなかったのである。しかしこれは「之」の使い方がおかしいと思わないのだろうか。「女王の所、都」であつて、「女王のミヤコする所」という具合に「の」が「ミヤコ」に係るのではないのである。たとえば「橋の向こうに我が社、高い建物がある」という文は並び替えて「橋の向こうに高い建物、我が社がある」としても、我が社と高い建物の並んだ位置によって双方の強調度は少し

異なってくるかもしれないが、意味は同じである。「女王のミヤコする所」ではこのように位置を変えることはできない。すなわち「南至邪馬壹国、女王之所、都」と区切れればわかりやすいように邪馬壹国と女王の所と都は同じ場所を指していて順序を変えても文としては同じなのである。ただ、表現を変えているに過ぎない。そこでこの文を意識すれば「南に行けば邪馬壹国、それは女王が住んでいる所で、魏の地方行政機関のある都(ツ)に着く」ということでいかがであろうか。

ところがこの解釈には未だ異論の余地があった。それは地方行政機関というのは魏国の領土内に設けるのならわかるが、属国には置かないだろう、というものである。なるほど、確かにこの意見には一理あると認めざるを得ない。だが、属国に地方行政機関を置いてはいけないという規則が魏にあったのだろうか。新羅や百済を征服したのちに群制を敷いて都護を置いたことと多少異なるかもしれないが、魏としては東北の公孫、南の呉と戦う中で卑弥呼を倭国の王と認定して金印を与え(卑弥呼には届かなかったが)、難升米には黄幢を与えて魏の機関に取り込んで冊封体制による支配を強めるために地方行政機関の都と定めても支配者側としてはそんなに違いはなかろう。都督や都護にしなかったのは、そうすれば責任者に魏の者を任命せざるを得なくなり、卑弥呼の処遇が問題になり得るし、倭の謀反を心配しなければならなくなるからではないか。ということで「都」を「みやこ」とする読み方・解釈と比べれば「ツ」読みの方が合理性の視点で格段の違いがあろう。

歴史的断片として「伊都国」に触れておく。漢音の「イトコク」とし、発音をもじって所在地を糸島半島あるいは現在の糸島市とする説は少なくない。日本書紀・仲哀紀では「五十迹手(いととて)の本国を名付けて伊蘇国といった。いま伊都(いと)というのは訛ったものである」としているようにイソ国が整合すると書かれている。伊都国の所在地を論ずるならば語呂合わせで決めるのではなく、方角と距離をきちんと考察・明示して遺跡の所在を明らかにすべきと思う。

5.『奴』は「ヌ」

魏使が邪馬壹国に行く途中、伊都国の次に奴国を紹介している。筆者は以前、匈奴を「キョウド」と呼ぶことから「イドコク」と読んでいたものの、匈奴を「キョウド」と読む根拠を知らず鵜呑みしていたのであった。ところが、古代史の本を読むと「ナ」と読む人が多く、たまに「ヌ」と振り仮名を振っている本も見かけ、一体どちらが正しいのかと胸の中で叫んだことがあった。

「ナ」とする説は三宅米吉が戦前、儼の津に面していたからとか儼縣の呼称があったことを根拠とした。卑弥呼の時代に「儼の津」「儼縣」と呼んでいた証明は彼の論文になかったにもかかわらず、後の人は検証もしないでその説を鵜呑みにしていた。それに三国志に登場する鬼奴国・烏奴国など奴国系8国が儼の津に面しているとは証明されていない。坂靖氏は璧を王の象徴とし、璧が出土した福岡県春日市の須久・岡本遺跡を奴国と判断した。しかし、そこは少し内陸に入った所で儼の津に面しているとは認めがたいし、その東の近い所に位置している不弥国の特定が困難になる。彼はその後、奴国の中心地は博多周辺に移ったとして比恵・那珂遺跡を充てがうが、そこから璧は出土していないので王墓と言えないのではなかろうか。むしろ奴国を「儼の津」に結び付けたい意図が働いたと感じられる。この点からも奴国の儼の津説は疑わしくなり、須久・岡本遺跡の奴国説もおかしいことになる。筆者が距離・方角を基準にして呼子から順に辿っていくと奴国は早良遺跡のある一帯になった。坂氏に一里何メートルとして須久・岡本遺跡に充てたのか伺いたい。

「ヌ」とする側に立つと、まず呉音であることが挙げられる。そして北九州にある奴山古墳・奴

加岳・奴留湯、ほかに広島にもある地名はいずれも「ヌ」と発音する。他方、ナやドの地名がない。ということで「奴」は「ヌ」とするのが妥当であろう。

ついでながら「狗奴国」は「クヌ国」となる。この狗奴国は三国志の写本には邪馬壹国の南にあると記述されているが、すんなり受け入れられない。なぜなら後漢書では邪馬臺国の東の海を渡った千里の所にあると記しているからである。既に本論で指摘したように後漢書は三国志の原典をほぼコピーしたものであるから、狗奴国は山口県か愛媛県にあったことになる。とすれば女王の国と狗奴国が戦ったとする解釈の蓋然性がますます薄れてしまう。これは古代日本史の大きな課題であるのに、多くの著書は三国史・倭人の節にある「倭女王卑弥呼與狗奴国王卑弥弓呼素不和」の「不和」を「同意しない」という意の検討をしないで、安直に「卑弥呼と卑弥弓呼はもともと仲が悪く、戦いをした」などと解釈しているが、それで良いのかと改めて問題提起しておく。

6.『磐余彦』は「いわれひこ」で正しいか・・・和風諡号と漢風諡号

最後に日本の文献から一つ取り上げてみたい。日本書紀に目を通すたびに長ったらしくて読むのに一苦労する人名は、本当に使われていたのかと疑問に感じる。文字数が少なくて日本のヒーローとも思える「磐余彦」、一般的には「いわれひこ」と読まれている人物が居たことになっている。先ず読者に伺いたいのは「磐」は「いわ」としても「余」ははたして「れ」と読めるのか。漢和辞典を引くのは適切かどうかかわからないが、一応見てみると音は「よ」で訓は「あまり」で、呉音・漢音ともない。ただ名前に「われ」とある。もしかして「わ」が消えていったのか。ほかにもこのような不思議な字は幾つもある。日本書紀の編集委員会は無理と思える当て字を使ったのか、それとも解説した言語学者のせいなのだろうか。そのように読むきちんとしたルールがあるのなら明らかにするのが研究課題の一つになるのではなかろうか。

黒板勝美氏が編集した日本書紀では本名は「彦火火出見(ひこほほでみ)」、そして磐余彦も正式には「神日本磐余彦天皇(かみやまといわれひこのすめらみこと)」としている。前者が本名とするならば後者は何なのか。ほかに「神武天皇」という名もある。幾つもの名前があって複雑だが、現在の人でも本名のほかに小説家ならペンネーム、俳優なら芸名、近年ではラジオに投稿する時はラジオ・ネーム、パソコンではメール・ネームやブログ・ネーム、それ以外に死んだ後には伝統的な戒名または法名など結構多様な名前が聞かれる。古代、王など貴人と呼ばれる人に死後、その人の事蹟を讃える意味で付けられた名を贈る意味で贈り名、諡(おくりな)または諡号(しごう)と言い、生前の名を諱(いみな)と呼んでいる。諡号には二種類あって日本風なものを和風諡号、大陸で使われているようなものを漢風諡号と呼び、磐余彦は和風諡号、神武天皇を漢風諡号と称している。これらの名称が根本的におかしいのは、磐余彦は紀元前600年頃の人とされており、文字もない時代になぜそのような名前が付いているのか、ということである。つまり、日本書紀編集委員会の創作であることは明らかである。創作物を史書として扱うことは許されないだろう。

繰り返すと磐余彦の諱は彦火火出見(ひこほほでみ)とされ、小島憲之氏は「火火出」が東アジアの大陸の文献に出ていると述べ、また韓国の歴史学者の千寛宇氏は新羅に「火」の字の人物がかなり居ると述べているので、どうやら諡号だけでなく諱も輸入品の可能性が高いのではないかと。

日本書紀の黒板編集本には天皇には片仮名でルビが振ってあるが、日本書紀の一番古い写本と言われている田中本にはルビがなく、黒板本のルビは当時の読み方であったか非常に怪しいもの

である。漢風諡号については淡海三船(722-785)が大陸の文献から撰したとされているが明確な証拠が発表されていない。もしそうだとしたら、彼は日本書紀が成立した後に生まれたのであるから日本書紀の出版時に天皇名が書かれるはずがない。天武には天皇と記された木簡が発見されたのでその頃には天皇という称号は使われていたとする説があるが、その資料について天武の時代に書かれた証拠がなければその説が成立するとは判断できない。近年・現代においてチャンバラ小説はたくさん出版されているように、書かれた年代と内容の年代とは異なることが少なくないので、年代の判定には注意が必要である。

天皇の名称は大陸の文献から抽出されたものだが、神武についてはどの文献から抽出したのだろうか。生憎ネタがわからないので大陸の文献で探してみた。すると北斎書と北史にはAD550年に(東)魏国を改称した(北)斎国の皇帝に「神武皇帝」が記されていた。朝鮮半島の三国史記・新羅本記には「神武王」が登場するも、その年代は839年だから日本書紀への輸入はあり得ず、列島には大陸から輸入され、三国史記や日本書紀その他の文献に採り入れられた蓋然性が高い。

神武皇帝の事蹟を記述した文献は北斎書と北史のうち北史の記述は所謂「神武東征」と言われる磐余彦が九州から奈良へ凱旋する過程の記述が似ているのである。筆者は北史の記述を骨子としてこれに尾鱗を付けて磐余彦東移動物語を編集したと解し、拙著『衝撃!日本の古代史』〔4〕磐余彦の東征物語の輸入の元を見つけた」で述べ、磐余彦の東方移動を鵜呑みにした神武実在説に警鐘を鳴らしたつもりである。

磐余彦については(1)どこの出身で卑弥呼とはどのような関係だったのか、九州倭国のどの地位にあったのか、どうして宮崎県に居たのか。(2)東征の動機の元になった兄や子達が「遠い所では王の恵沢が及んでおらず、村々は争っている」という情報をどうやって得たのか、また遠い所とはどこか。紀元前600年に王制があったのか。(3)鹽土老翁(しおつちのおじ)がどうして東に美地があるなどとわかるのか、「都」を作らんや、という都とは何か、冊封国の地方行政機関を作るということは大陸の手先だったのか。(4)磐余彦は樞原で「即位した」とあるが何に即位したというのか、既に何か最高位を示す役職や制度があったのか。(5)九州から奈良に移ったことを証明する遺物は何か。(6)纏向辺りには九州の地名が見当たらず、地名遷移したと言えるのか。こうした疑問に対する答えが見つからない。従って磐余彦東征説の成立根拠は極めて希薄であるとしか言えない。鉄製品や銅鏡の年代ごとの出土状況や稲の水耕跡の状況から確かに九州からへ東に移っていることは認められが、そうした人達に磐余彦のモデルが居たという具体性のない説明では「真理は具体的に個別的」という真理追究の原則に反し、歴史学の発表として認めるのは困難であろう。

了

引用・参考文献

- 沼本克明 「日本漢字音の歴史」1986 東京堂
黒板勝美編「日本書紀」日本国史大系第一巻 2007 吉川弘文館
森 博達「日本書紀 書き替えの主導者は誰か」2011 中央公論社
三宅米吉「考古学研究」1929 岡書院
尾関 郁「衝撃!日本の古代史」2021 V2ソリューション
尾関 郁「衝撃!日本の古代史」2022 web ブログ
坂 靖「ヤマト王権の古代学」2020 新泉社

小島憲之「上代日本文學と中国文學」1993 第7版 塙書房
浜名寛祐「日韓正宗遡源(神頌契丹古伝)1987 八幡書店
千 寛宇・金 東旭「『比較』古代日本と韓国文化(上)」1980 学生社
金 富軾・井上秀雄訳「三国史記」1988 平凡社
陳 寿「三国志」四部備要第一八冊 1989 中華書局
范 曄「後漢書」四部備要第一七冊 1989 中華書局
李 延寿「北史」四部備要第二三冊 1989 中華書局
諸橋徹次「大漢和辞典」1055 大修館